

2014年度特別研究期間 研究成果概要

所属・職・氏名： 社会学部・教授・鈴木慎一郎

研究課題：アフリカ系アメリカスのポピュラー音楽のトランスナショナル化に関する研究——
ポスト・パッケージ時代をも視野に入れて

研究期間：2014年4月1日～2015年3月31日

研究成果概要（日本文（全角）の場合は2,000字程度）

この研究が取り組もうとした問いは、主に次の二つであった。第一に、アフリカ系という集団と結びつけられた形で「人種化」されてきた音楽が脱領土化していくさいに、その音楽を受容・消費・流用する個人や集団の、人種的または国民／民族的な自己認識や、場所または空間と関連づけられた自己認識は、どのように（再）構築されるのか、という問いである。第二に、消費文化のグローバルな広がり、メディア技術の革新とが、これらの音楽をめぐるローカルな実践をどのように（再）節合するのか、という問いである。この場合のメディア技術に関しては、特に、CDなどのパッケージ化された音楽商品に比してインターネットを介した音楽配信がより顕著になってきたここ数年の「ポスト・パッケージ時代」についても、視野に含めた。以上の二つの問いを、カリブ海地域英語圏諸社会に起源を持つレゲエ音楽をめぐる諸実践を事例として考察した。

その結果、以下のような主に三つの点を指摘することができる。

第一に、近年のヨーロッパ諸国における、レゲエ音楽の制作、録音物リリース、イベント等の活性化。カリブ海地域の旧英国領に出自を持つ人口を一定程度抱える英国をはじめとし、フランス、ドイツ、イタリア等の国々では、レゲエ音楽のフィジカル・リリース（物質としてのレコード盤やCDの形でのリリース）、特に、レゲエをめぐる音楽文化の歴史においては永らくフェティッシュ化されてきたシングル盤レコードの形でのリリースを、今日の世界では最も活発に行なっており、また都市部を中心に、レゲエ音楽のイベントも盛んである。近年新たにリリースされた楽曲群について述べるならば、歌詞においては、ラスタファアーライ（1930年代のジャマイカを起源とする社会宗教運動で、それに由来する語彙は、レゲエが1970年代に世界的に知られるようになって以来、この音楽ジャンルの歌詞においてある程度の割合を占め続けている）のクリシェも少なくない一方で、ラスタファアーライの思想を今日のヨーロッパ諸国における具体的な問題（若者の貧困や失業、多文化的状況における他者への不寛容など）を表現したものもかなりの数が見受けられる。近年リリースされた楽曲の、音楽様式の面について述べるならば、特筆すべき傾向としては、特に英国の諸都市に直接の起源を持つさまざまなクラブ音楽（ジャングル、ドラムンベース、グライム、ダブステップなど）との継続的なハイブリッド化に加えて、チップチューン（1980年代の家庭用ゲーム機の内蔵音源やそれを模した音源を使用した楽曲）とのハイブリッド化を挙げることができる。後者の傾向は、ジャマイカ発の音楽が経験してきたさまざまなハイブリッド化の系譜においては現在最新のものにあたり、ストリート文化とギーク（geek, いわゆるコンピューターオタク）文化との、意外ではあるものの豊饒な混成化の可能性を示している。そこではまた、日本のゲーム機のテクノロジーがしばし

ば参照されていることも、テクノオリエンタリズムの観点から興味深い。

第二に、発祥の地ジャマイカにおける、レゲエ音楽の文化資源化に向けた近年の動向。21世紀に入ってからのジャマイカ社会では、レゲエ音楽は同国のソフト・パワーの中心を担うコンテンツであるとの認識が浸透しており、この音楽に関する研究も、産学官の協力や連携によって行なわれる機会が増えてきている。ジャマイカにとって観光は重要な産業であるため、往年の音楽スタジオやレコード店やそれらの保存などがヘリテージ・ツーリズムの文脈で話題に挙げられることも多い。これらの一連の動向は、英米を中心とした世界のポピュラー音楽のメインストリームにおけるジャマイカ音楽のプレゼンスの相対的な低下（1990年代前半と比較すると、多国籍メジャーレーベルと契約を結んだジャマイカの音楽家は今日、激減している）を、背景にしたものとみることができる。レゲエを核としたコンテンツ・ナショナリズムや文化振興や文化政策や文化経営の言説は、ジャマイカ国内ではいまやまったく珍しいものではなくなっており、この音楽をめぐる1970年代以来展開されてきた対抗文化的な言説や反資本主義的な言説については、この新しい文脈に照らしながらより複雑な議論を始めなくてはならない段階にきているといえる。

第三に、日本における、レゲエ音楽によって媒介されたローカル・アイデンティティーの表現の動向。21世紀に入って最初の十年間が過ぎようとする頃から、他の音楽ジャンルと同様にレゲエにおいても、フィジカル・リリースされる楽曲の減少、ソーシャルメディアや動画投稿サイトを介したコミュニケーションの活発化、ライブイベントの重要性の高まりなどが進行した。ライブイベントについて特筆すべきなのは、レゲエ音楽において以前はほとんど行なわれることが無かったいわゆる「アコースティック・ライブ」が、もはや珍しいものではなくなったという点である。これは、少人数の編成で全国各地のカフェなどの小規模の会場をツアーして回るのに都合のよい形態であると言える。歌詞について言えば、ナショナリズム的な歌詞はそれ以前からある程度みうけられたが、特に2010年代に入ってから、地方在住者のローカル・アイデンティティーがレゲエによって媒介された形で表現されるという例が、より顕著になってきているように思われる。こうして、今日の日本における「まちおこし」やローカル・コミュニティの（経済面での活性化をも含めた）エンパワーメントをめぐる諸々の言説および実践との関連において、レゲエ音楽をとらえることが、きわめて重要になりつつある。その意味では日本の事例についても、ジャマイカの実例についてと同様に、レゲエ音楽をめぐる従来の対抗文化的な言説や反資本主義的な言説にかんしての議論を今後複雑化させていかなくてはならないようである。

以上